

第四の国家級新区 浙江省舟山群島新区

2013.05.31

香港 花木

中国には全国で数千の開発区があると言われているが、特に沿海部には特徴ある開発区が揃っている。南から挙げると、①広西チワン族自治区の防城港、湛江、②広東省の横琴島、南沙、前海、③福建省の平潭島、④浙江省の舟山、⑤上海市の浦東、⑥江蘇省の連雲港、⑦天津市の濱海、⑧河北省の曹妃甸、⑨遼寧省の丹東といったところであろう。いずれも大規模な公共事業により高速道路や鉄道、長大橋を架け、海を干拓したり埋め立てたりして巨大な土地造成を行っている。



↑ 沿海部の主な開発区。数字は上記記事に対応。赤枠は舟山。

開発区の中でも国家級新区と呼ばれるものは格別にランクが高い印象があった。1992年に最初に国家級新区となった上海浦東新区は、今や知らぬ者はいないほどの成功を収めており、次いで1994年に指定された天津濱海新区には携帯電話や自動車、航空機や製薬、風力発電等の大規模産業が林立している。しばらく間をおいて2010年に指定された重慶两江新区もその面積は1000平方キロと東京23区の1.5倍に相当する区域内に空港や高速鉄道の駅を整備し、HPやフォックスコン等により大規模なパソコン生産拠点が設けられる等華々しい成績を残している。いずれの国家級新区も、上海は江沢民元総書記、天津は温家

宝前総理、そして重慶は失脚した薄熙来前政治局員の肝いりとみなされ、巨大な政治力を背景に金に糸目をつけないインフラ投資を進めてきた。

こうした中で、2011年に上海、天津、重慶に次ぐ第四の国家級新区が『舟山群島』に指定されたとき、明らかに従来とは風向きが変わった感触があった。更に相次いで2012年には甘肅省蘭州、広東省広州市南沙と国家級新区の指定が相次ぎ、従来の華々しい新区のイメージがずいぶんと安売りされるようになった印象を受けたのは筆者だけではないだろう。『舟山群島』は寧波市の沖合にある『舟山市』の区域であり、従来と異なり直轄市どころか省都ですらない浙江省の一地方都市である。当初、これは新たに総書記となる習近平氏が浙江省書記だったことから、習近平氏肝いりのプロジェクトではないかと考えていた人もいたようだが、更に蘭州、広州と指定が相次ぐにつれ、この解釈にも疑問符がつくようになった。あえて政治的に解釈すれば、薄熙来前政治局員が重慶に引っ張ってきた「第三の国家級新区」という政績を色あせたものにするためにこれほど地味な開発区を国家級新区に指定しているのではないかとすら勘ぐることもできるかもしれない。ともあれ5月下旬にこの「第四の国家級新区」『舟山群島』を訪問したので以下にご紹介してみたい。



↑ 上海の沖合、杭州湾の入り口に点在する舟山群島。広州市を中心とする「珠三角」における香港と同じ立地環境にあることから、「上海の香港」をキャッチフレーズにしている。

舟山群島は面積 470 平方キロと淡路島よりやや小さい面積の舟山島を中心に広がる約 1400 もの群島である。長らく寧波市の沖合にあり船で往来するしかなかった舟山市だが、2009 年に大規模な架橋と高速道路が開通し、寧波市から車で約 1 時間半の距離となっている。淡路島の人口が 15 万人程度なのに対し、舟山市は百万人を超える人口を持つだけに、中心部はマンションや百貨店が林立しており、住宅価格も 1 万 7 千元/㎡程度と比較的高価である。



←車通りの少ない舟山新市街地(臨城地区)

◎テーマは海洋経済

さて、舟山群島新区だが、そのテーマは海洋経済である。具体的には海洋関連製造業（造船、関連機械・部品製造、海洋資源・海洋エネルギー関連、海洋食品関連等幅広い概念のようである）、海洋関連物流業、海洋関連サービス産業（観光等）等をイメージしているようである。一方で、現在の豊かな海洋自然環境を損なうような高汚染型・高資源消費型産業は排除し、環境と発展の両立を図っていきたいということであった。（とはいえ、こうしたお題目は今日の中国においてはどの開発区もほぼ共通である。）

舟山群島新区の開発の中心は、舟山島の北側に設けられた新港工業園区である。総面積約 37 平方キロと舟山島全体の約 10 分の 1 に相当するこの工業園区は、もともと島から突き出していた半島の両側を埋め立てて造成した土地で、かつての豊かな漁村が埋め立てによって陸の孤島のように工業園区のだ真ん中に残されてしまっている。お題目としての『海洋・自然との共生』と、ホンネとしての『開発区造成による金儲け』という両極端の姿がそのまま露出するような奇妙な光景を現出させている。



↑ 既に全区画売却済みという一期地区。かつてここは海だった。

これらの埋め立て地は 2008 年から埋め立て作業を開始し、既に第一期分 15 平方キロについては企業への売却が終了、造船や食品等の企業が立地している。また、第二期分 10 平方キロについては現在企業誘致中で、特に海岸に接した区画については、沖合にバースを伸ばすことで直接 20 万トンクラスの船舶が接岸可能な立地を売りとして、自社専用ふ頭を持つような大規模工場の誘致を進めているということであった。埋め立て地の造成費用は 1 ムー（667 m²）当たり 55 万元（m²当たり 1.4 万円）であったが、企業への売却額は同 35 万元と造成費用より 20 万元安く設定しているという。更に企業の知名度、業種によっては

「極端な話、土地代はタダでもいい」（開発区葉同傑副主任）とのことで、現在1社も入居していない日本企業をぜひ誘致したいということであった。このあたりの手法は、相変わらず透明性と独立採算を基本とする日本の工業団地とは全く異なる点で、「土地造成費で損を出しても、その後の税収や雇用で得すればよい」という、中国地方政府ならではの商売人的発想である。



↑ 造成したばかりの第二期地区（右側）。築堤をはさんで外海（左側）に面する立地だ。

◎立地とインフラ次第では将来大化けも

さて、確かに埋め立てだけで50億元（850億円）ともいわれる巨費を投じたとはいえ、新港工業園区は規模としてさほど大きなものではなく、国家級新区という名前と相違し、受ける感触は一地方の開発区並みにすぎない。ただ、将来的にこの地域はインフラの整備次第では大化けする可能性もある。

既に2009年に寧波から舟山を結ぶ高速道路が開通しているのは前述のとおりだが、この高速道路を更に延長して、上海の沖合にある世界最大のコンテナターミナル洋山深水港と直結する構想があるからである。既に上海から洋山までは大規模なコンテナ専用海上道路が開通済み（<http://chinareport.dousetsu.com/110907.pdf>）であるが、これを更に舟山まで延長し、寧波までの高速道路と連結することで、上海と直結した海上高速道路を建設する計画が既に國務院の批准を受けているという。これが完成すれば、舟山は杭州湾の湾口を南北に横断する海上高速道路の結節点となり、将来的に大きな発展が期待されるだけでなく、コンテナ船の利用便利性も飛躍的に高まることになる。更にその先には、上海と寧波を結ぶ海上高速鉄道の計画もあるということで、完成のあかつきには杭州海の対岸、上海の浦東空港の持つ国際ネットワークをそのまま利用できることになる。



↑ 既にある上海—洋山の海上道路と舟山—寧波の道路を連結することで、杭州湾を直結する海上道路が出現するという。



↑ 現在の舟山新港園区共用コンテナふ頭。定期コンテナ路線は間もなく就航予定という。

また、こうした交通インフラの他に、舟山群島の一つ、衢山島には、島全体をつぶして石炭や鉄鉱石、原油を備蓄する大規模ターミナルを設置する計画もあるようだ。上海洋山港がコンテナのターミナルだとすれば、衢山はばら積み貨物のターミナルとして、その深い喫水（50万トン級の船舶が接岸可能という）を利用し、海外から輸入した資源をいったん陸揚げ、備蓄しつつ、小規模な船舶に積み替えて国内各地に輸送する中継拠点とするという計画である。

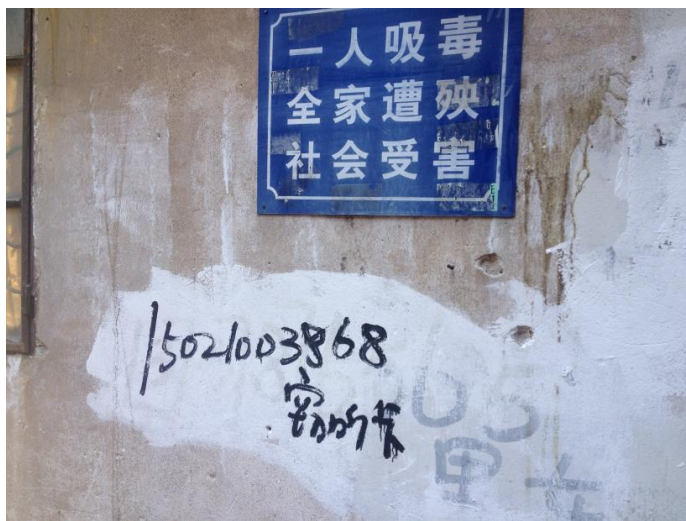
ただ、こうしたインフラ整備には当然ながら巨額のコストが必要で、中国政府が実際にどこまでこれらの計画を実現させられるのか、国務院の批准を受けた以上建設される可能性が高いとは言っても、一応不確定要素があると考えておいたほうがよいかもしれない。

◎大きな留保

さて、これまで舟山群島新区のポテンシャルとリスクについて述べてきたが、一つ基本的な問題も指摘しておきたい。舟山だけではないが、中国の沿海部、特に南部沿海部は社会的に独特な環境にある。それは、特に漁業を中心としたこれらの地域、特に中小都市においては、宗族と呼ばれる親族ネットワークが発達し、事実上基層社会においては政府より強い力を持っていることがあることである。これらの地方に行くと気が付くのは、こうした地域の人々は遵法意識が極端に低いことで、その理由として「法律違反をしても、自分たちの宗族ネットワークを利用して働き掛ければ捕まることはない」という考えが浸透していることが挙げられよう。彼らの宗族の中には必ず地方政府の役人が組み込まれており、同じ宗族の誰かが法律違反をしたりしてもこのネットワークを使って働きかけることで罪を逃れる（もみ消し）ことがいとも簡単にできるわけだ。同時に彼らは独特の方言を使ってコミュニケーションしており、外部の者と自分たちとの間で意識形態が大きく異なっている特徴がある。典型的なのが広東省のスワトウで、かつて紹介したとおり、この地域が1980年代に全国最初の4つの特区の1つとしてアモイ、珠海、深センと同時に指定されながら、いまだに経済発展から完全に切り残されているのはこうしたバックグラウンドと切り離して考えることはできない。（<http://chinareport.dousetsu.com/120505.pdf>）

舟山も、もともと漁業に依存した小都市であり、現在のようにその多くが土着の舟山人である限り、構造的にはこの地域もスワトウと同じ問題を抱えているようだ。彼らは遵法意識が低く、親族の人間関係を圧倒的に重視し、（仮に法令に抵触しても）その頼みを断ることはない。こうした中国南部沿海部の人々の行動については、最初から色眼鏡で見るべきではないとしても、やはり日本人としては十分な研究と慎重な対処が必要であろう。こうした地域の代表例としては他にも広東省潮州市があるが、香港の大富豪李嘉誠はこの町の出身であるにもかかわらず、出身地に対して寄付こそすれ投資をすることは決してしていない。中国政府自身もこうした地域では例えば一人っ子政策にしても全く実行できておらず、一家に子供が5人も6人もいるのは普遍的であるという。法すら立ち入れず、人間

関係と貸し借りだけが行動を支配している南部沿海部の地域に、日本企業が特段の防御策を講じずに大規模な投資をすることは、非常に危険としか言いようがないだろう。



←麻薬をやめようという標語のすぐ下にかかっている「盗聴電話カード売ります」という広告。



←機関銃売りますという広告が平然と民家の壁に連絡先電話番号とともに書かれているのは普通でない。(いずれも潮州市内)